

IF セミナーレポート

10/01/25

国際日本研究専攻

ムラドワ・エーラ

発表題目：中央アジアの日本語教育における文学の役割

発表概要

### 1. 研究の背景と目的

ウズベキスタン共和国は、1991年9月に旧ソ連より共和国独立宣言して以降、本格的な日本語教育が開始された。現在、様々な言語教室や学校のみならず、高等教育にも日本語教育が盛んにとりいれられていて、日本語自体も、日本文化や伝統、主にサブ・カルチャーが注目を浴びている。

ウズベキスタンにおける日本語教育環境を孤立環境と呼ばれている。地域内に日本語コミュニティがなく、旅行、留学などで日本に行くことがまれで、教室外で日本語と接触のない海外環境における日本語学習環境を孤立環境における日本語教育と福島(2005)が呼ぶ。

その環境では、教室内だけで限られた時間の中でどこまで日本語を教えられるかは課題の一つである。そこで読解が注目される。本研究では、主に読解の二つの側面を取り上げることとする。その①異文化間コミュニケーション的な側面と、②言語形式への気づきを生じさせる側面である。

文学的教材の効果や役割を検討し、語彙の深さと広さが身に付くような有効な読解指導法を導き出すことを最終目的と設定し、そのために

- ① ウズベキスタンの日本語学習者は文学的読解を行う中で、言語形式への気づきとしてどのようなものが考察されるのかを調べ
- ② 同じ文学作品を読む際、日本語母語話者とウズベキスタンの日本語学習者の語彙の深さの理解（いわゆるコノテーション）の理解はいかに異なるのかを調査し、結果を分析して考察する。

### 2. セミナーでの発表内容

1. ウズベキスタンにおける日本語教育
2. 読解の役割
3. 文学的読解
4. 語彙の深さ・広さ
5. 研究の最終目的
6. 現地調査報告

### 3. 研究課題

まず、ウズベキスタンにおける日本語教育の歴史を展望し、現在ウズベキスタンにおける日本語教育にどのような読解教材が使われているのかを分析し、その特徴を探る。そして、ウズベキスタンの日本語学習者に文学的読解を与え、それを読んでいる中でどのような言語形式への気づきが生じるのかを観察し、それをまとめ、傾向を明らかにする。同じく、ウズベキスタンの中上級の日本語学習者と日本語母語話者の語彙のコノテーションとデノテーションの理解の違いを観察し、その傾向を明らかにする。つまり、学習者には理解が困難だったと見られる語彙には、どのようなカテゴリの語彙が多かったか、その語彙の意味的特徴、語用的特徴を探る。

#### 質疑応答

指定討論者のお二人からは、ウズベキスタンに環境ではどうして読解が大事なのか、他の活動では孤立環境における日本語教育の課題が解決出来ないのか、そして語彙の広さや深さは本当に文化理解と繋がるのか、そして文化が合っただけの言葉の意味か、言葉の意味があっただけの文化なのかといった幅広い質問をして頂いた。

他のプログラム生からは、現地調査に関して日本語能力と日本人との接触頻度という二つの要素が混じり合うので、はたして出た結果は本当知りたかった結果なのか、そして孤立環境であってもインターネットの普及を無視できるのかといった質問を頂いた。

今回の発表では、現地調査の報告は時間の関係であまり具体的に出来なかったもので、誤解が生じて、それをクリア出来なかったのは反省点である。他領域の方から意見を聞くことができ、現在の自分自身にどのような視点が欠けているか浮き彫りになった。今回の発表でいただいた質問やご意見をこれからの研究にいかしていきたいと思う。